

第 1 章 教科等横断的な視点での教育課程の編成

第 1 節 教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編 では、児童に「生きる力」を育むことを目指し、学校教育全体及び各教科等の指導を通してどのような資質・能力の育成を目指すのかを、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理し、明確化することが求められています。

育成を目指す資質・能力の例については、児童の発達段階を考慮し、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとされています。変化の激しい社会の中では、主体的に学んで必要な情報を活用し、よりよい人生や社会の在り方を考え、多様な人々と協働しながら問題を発見し解決していくための力が必要になります。このような力を児童一人一人に育むためには、あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力や、教科等の学習を通じて身に付けた力を活用して、現代的な諸課題に対応していくための資質・能力を、教育課程全体を見渡して育んでいくことが重要になります。

（１）各教科等で身に付ける資質・能力

各教科等において何を教えるかという内容は重要になります。その内容を学ぶことを通じて、「何ができるようになるか」を意識した指導が求められています。「この教科を学ぶことで何が身に付くのか」という、各教科等を学ぶ本質的な意義を理解し、学びを教科等の縦割りにとどめるのではなく、教科を越えた視点で、教科等間の関係性を深めながら学び続けていくことが求められています。

（２）学習の基盤となる資質・能力

人は生涯にわたって学び続け、その成果を人生や社会の在り方に反映していくようになります。そうした学びの本質を踏まえて、あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力を育んでいくことが大切になります。そのためには、児童の発達段階を考慮しながら、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことが求められています。

ア 言語能力

言語は、児童の学習活動を支える重要な役割を果たすものです。教科書や教師の説明、様々な資料等から新たな知識を得たり、事象を観察して必要な情報を取り出したり、自分の考えをまとめたり、他者の思いを受け止めながら自分の思いを伝えたり、学級で目的を共有して協働したりすることができるのも、言語の役割に負うところが大きいと言えます。様々な情報を理解して考えを形成し、文章等により表現していくために必要な言語能力は、学習の基盤として時代を超えても常に重要になるものです。これからの時代においてもその重要性が変わることはありません。したがって、言語能力の向上は、児童の学びの質の向上や資質・能力の育成の在り方に関わる重要な課題として受け止め、重視していくことが求められています。

イ 情報活用能力

将来の予測が難しい社会においては、情報や情報技術を受け身として捉えるのではなく手段として活用していく力が求められます。情報活用能力とは、世の中の様々な事象を情報とその結び付きとして捉え、情報及び情報技術を適切かつ効果的に活用して、問題を発見・解決したり自分の考えを形成したりしていくために必要な資質・能力です。情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいくためには、情報活用能力の育成が重要になります。今後、情報技術は人々の生活にますます身近なものとなっていきます。そうした情報技術を手段として学習や日常生活に活用できるようにしていくことが重視されています。

ウ 問題発見・解決能力

各教科等において、物事の中から問題を見だし、解決の方向性と解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程を重視した深い学びの実現が求められています。各教科等の問題発見・解決に必要な力を身に付けられるようにするとともに、総合的な学習の時間における横断的・総合的な探究課題や、特別活動における集団や自己の生活上の課題に取り組むことなどを通じて、各教科等で身に付けた力が統合的に活用できるようにすることが大切になります。

(3) 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力

豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に照らして必要となる資質・能力を、それぞれの教科等の役割を明確にしながら、教科等横断的な視点で育てていくことができるよう教育課程を編成することが求められています。これらの資質・能力として、

- ・健康・安全・食に関する力
 - ・主権者として求められる力
 - ・新たな価値を生み出す豊かな創造性
 - ・グローバル化の中で多様性を尊重するとともに、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力
 - ・地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力
 - ・自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力
 - ・豊かなスポーツライフを実現する力
- などが考えられます。

各学校においては、児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮して、学校の特色を生かした目標や指導の重点を計画し、教育課程を編成・実施していくことが重要になります。

※参考文献：【総則編】「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説【総則編】」

平成 29 年 7 月 文部科学省

【答 申】「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」

平成 28 年 12 月 21 日中央教育審議会

第2節 教科等横断的な視点を取り入れた授業の実施

・教科等横断的な視点に立った評価と留意事項

学習評価の円滑な実施に向けた取組について

・学習評価については、日々の授業の中で児童生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要であること。したがって観点別学習状況の評価の記録に用いる評価については、毎回の授業ではなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場面を精選することが重要であること。

・観点別学習状況の評価になじまず個人内評価の対象となるものについては、児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるよう、日々の教育活動等の中で児童生徒に伝えることが重要であること。特に「学びに向かう力、人間性等」のうち「感性や思いやり」など児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価し児童生徒に伝えることが重要であること。

・言語能力、情報活用能力や問題発見・解決能力など教科等横断的な視点で育成を目指すこととされた資質・能力は、各教科等における「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の評価に反映することとし、各教科等の学習の文脈の中で、これらの資質・能力が横断的に育成・発揮されることが重要であること。

※参考文献：【改善等通知】「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）」

平成31年3月29日 初等中等教育局長通知

4. 学習評価の円滑な実施に向けた取組について(2)(3)(4) 抽出

・主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善

これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに教科等横断的な視点に立った学習が重要であり、各教科等における学習の充実はもとより、教科等間のつながりを捉えた学習を進める必要があります。

そのため、教科等の内容について、「カリキュラム・マネジメント」を通じて相互の関連付けや横断を図り、必要な教育内容を組織的に配列し、各教科等の内容と教育課程全体とを往還させることが求められます。

【答申 P24 参考】

(1) 「主体的な学び」の視点

ア 「学習者」の視点

児童が学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているということです。

そのためには、子供自身が学ぶことに興味や関心を持って積極的に取り組むとともに

に、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付けた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要です。

イ 「授業者」の視点

- (ア) 既習事項を振り返ったり、具体物を提示して引き付けたりして、子供が明らかにしたくなる学習課題を設定します。
- (イ) 子供が自らめあてをつかむようにし、学習課題を解決する方向性について見通しを持たせ、子供が自分の考えを持つようにします。
- (ウ) 子供の思考を見守り、子供の思考に即して授業展開を考え、子供の考えを生かしてまとめます。
- (エ) その日の学びを振り返り、新たな学びに目を向けさせます。

(2) 「対話的な学び」の視点

ア 「学習者」の視点

児童が子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」ができているということです。

そのためには、身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るために、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって自己の考えを広げ深めていくことが求められます。

イ 「授業者」の視点

- (ア) 思考を交流させるようにします。
- (イ) 交流を通じて思考を広げられるようにします。
- (ウ) 協働して問題解決ができるようにします。
- (エ) 板書や発問で教師が子供の学びを引き出せるようにします。

(3) 「深い学び」の視点

ア 「学習者」の視点

児童生徒が各教科等における習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかということです。

子供たちが、各教科等の学びの過程の中で身に付けた資質・能力（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう人間性等」）を活用・発揮しながら物事を捉え思考することを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていくことが重要です。

イ 「授業者」の視点

- (ア) 資質・能力を焦点化します（つきたい力を明確にします）。
- (イ) 単元や各授業の目標を把握します。
- (ウ) ねらいを達成した子供の姿を具体化します。
- (エ) 教材の価値を把握します。

(オ) 単元及び各時間の計画を立てます。

(カ) 目標の達成状況を評価します。

教職員はの中で、教える場面と、子供たちに思考・判断・表現させる場면을効果的に設計し関連させながら指導していくことが求められます。

※参考文献：【主体的・対話的で深い学び】

「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について」

令和2年6月 国立教育政策研究所教育課程研究センター